

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト オス か み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て し を
 神 爾 十 字 架 死
 ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く え ん を ひ
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開
 ら き 、 け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ
 携 香 女 悲 慰
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か 界
 使 徒 爾 復 活 世 界
 い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え
 大 憐 賜 傳
 さ せ た ま え り 。
 給

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠
 じ つ に し て し ん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖
 な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い
 神 撰 笛 愛
 に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こう
 満 器 我 國 光
 し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第7調 】

いまもおいつうもよよにい、アミン
 今 何 時 世 世 に い、ア ミ ン
 しのけんはすでにひとびとをとらうるあた
 死 権 已 人 人 捕 能
 わず、けだしハリストスはくだりてそのち力
 蓋 降 力
 からをやぶりてほろぼしたまえり。ぢご
 敗 滅 給 地 獄
 くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ
 縛 預 言 者 同 心 喜
 こびてよぶ、きゆうせいしゅはしんにおる
 呼 救 世 主 信 居

ものにあられたり、しんじゃよ、ふく
 者 現 信者 復
 か つ して い で よ 。
 活 出

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。こうえいはちちとこせいしん
 光榮父子聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第7調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて ^{しゅうじん} 聴く ^{へいあん} べし、衆 人 に 平 安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の 神 にも、

司祭) ^{えいち} 睿 智、

誦經) ^{しゅ} プロキメン、^{そのたみ} 主 は 其 民 に ^{ちから} 力 を ^{たま} 賜 い、^{しゅ} 主 は 其 民 に ^{へいあん} 平 安 の ^{ふく} 福 を ^{くだ} 降 さん、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ
其 民 平 安 福 降
さ さん。

誦經) ^{かみ} 神 の ^{しよし} 諸 子 よ、^{しゅ} 主 に ^{けん} 獻 ぜ よ、^{こうえい} 光 榮 と ^{そんき} 尊 貴 と を ^{しゅ} 主 に ^{けん} 獻 ぜ よ、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ
其 民 平 安 福 降
さ さん。

誦經) ^{しゅ} 主 は 其 民 に ^{ちから} 力 を ^{たま} 賜 い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く 降
主 其 民 平 安 福
だ さ さん。

【 ^{アポストロス} 使 徒 經 221 端 エフェス書 2 章 14 節～22 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、ハリストスは我等の和平なり、二の者を一と爲し、隔の墻を毀ち、己の身を以て仇を廢し、教を以て諸誠の律法を廢せり、是れ和平を爲して、二の者を以て、己に於て、一の新なる人を造り、又十字架にて仇を殺し、此を以て、一の身に於て、二の者を神と復和せしめん爲なり。且來りて、爾等遠き者及び近き者に和平を福音せり、蓋彼に由りて、我等二の者は、一の神に在りて、父に近づくを得るなり。故に爾等既に異民、或は他邦の人たらず、乃諸聖徒の同邦の人、神の家屬なり、爾等は諸使徒と諸預言者との基に建てられたり、イイスス・ハリストスは自ら其隅石なり。此の上に全屋は組み立てられ、次第に築きて、主に於ける聖殿と爲る、此の上に爾等も、神に由りて、神の居處として、共に建てらるるなり。

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廢棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまつたのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御靈の中にあつて、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであつて、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあつて、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、靈なる神のすまいとなるのである。

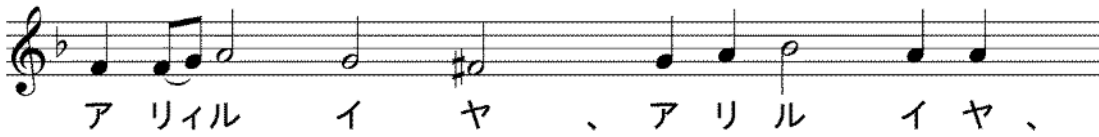
【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) 爾に平安、

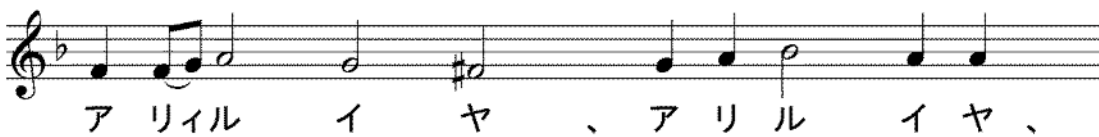
誦經) 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

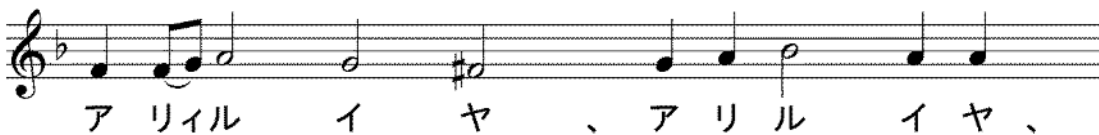
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しじょうしゃ} 至 上 者よ、^{しゅ さんえい} 主を讃 榮し、^{なんぢ な うた び かな} 爾 の名に歌 うは美なる哉、



誦經) ^{なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな} 爾 の 憐 を朝に宣べ、爾 の 眞 を夜に宣ぶるは美なる哉、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主 宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 浄 き光 を輝 かし、我が思念

^{め ひら なんと ふくいん おしえ さと たま わ うち なんと ふく いましめ} の目を啓きて、爾 が福音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に爾 の福たる 誠 を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんと よろこ ところ} 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉 體の慾を踏み、凡そ爾 の喜ぶ 所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ 行 いて、属 神の生 活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんと わげん ちち しせいしぜん} 爾 は我が 靈 と體 との光 照なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんと しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音 經 ルカ福音書 39 端 8 章 41~56 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き かく ととき な ひと かいどう つかさ もの きた} 謹みて聴くべし、彼の時イアイルと名づくる人にして、會堂の宰たる者、來りてイ

^{そくか ふふく そのいえ い もと けだしかれ ひとり むすめ としおよそじゅう} イススの足下に俯伏し、其家に入らんことを求めたり、蓋彼に獨の女、年約十

^{に もの いまし かけ ゆ ととき たみこれ お せま じゅうにねんけつろう うれ} 二の者ありて、今死せんとせり。彼が行く時、民之に擁し逼れり。十二年血漏を患う

^{おんな いし ため そのことごと しょう ついや ひとり いや え もの} る婦、醫師の爲に其悉くの所有を費したれども、一人にも痊さるるを得ざりし者は、

^{あと つ かけ ころも すそ さわ そのけつろうただち とどま い たれ} 後より就きて、彼の衣の裾に捫りしに、其血漏直に止れり。イスス曰えり、誰か

^{われ さわ しゅう みと ととき およ かけ とも あ ものい ふうし たみなんぢ} 我に捫りたる。衆の認めざる時、ペトル及び彼と偕に在りし者曰えり、夫子、民爾

^{めぐ お せま なんぢ たれ われ さわ い しか い われ さわ} を繞りて擁し逼るに、爾は誰か我に捫りたると謂うか。然れどもイスス曰えり、我に捫

^{もの けだしわれちから われ い おぼ おんな みづか かく あた み} りし者あり、蓋我能の我より出でしを覺えたり。婦は自ら隠す能わざるを見て、

^{おのの きた かけ まえ ふふく かけ さわ ゆえ またいか たちどころ いや} 戦きて來り、彼の前に俯伏して、彼に捫りし故、又如何にして立に愈されしを、

^{かけ しゅうみん まえ つ かけ これ い むすめ ころ やす なんぢ しん なんぢ} 彼に衆民の前に告げたり。彼は之に謂えり、女よ、心を安んぜよ、爾の信は爾

^{すく あんぜん ゆ かけ なおい ととき かいどう つかさ いえ ひときた いわ なんぢ} を救えり、安然として往け。彼が尚言う時、會堂の宰の家より人來りて曰く、爾

^{むすめすで し し わづら なか これ き つかさ こた い おそ なか} の女已に死せり、師を煩わす勿れ。イスス之を聞きて、宰に答へて曰えり、懼るる勿

^{ただしん かけ すく いえ きた およ しょうちよ ふ} れ、惟信ぜよ、彼は救はれん。家に來りて、ペトル、イオアン、イアコフ、及び少女の父

^{ぼ ほか たれ い ゆる しゅうじんため な かなし かけい な なか} 母の外、誰にも入ることを許さざりき。衆人爲に哭き哀めるに、彼曰へり、哭く勿れ、

^{かけ し あら すなわちい ひとびとそのし し かけ あざわら かけしゅう} 彼は死せしに非ず、乃寝ぬるなり。人人其死せしを知りて、彼を晒えり。彼衆を

そと いた そのて と よ い しょうぢよ お そのしんかえ ただち お
外に出して、其手を執りて、呼びて曰えり、少女、起きよ。其神返りて、直に起きた

かれ これ しよく あた めい そのふ ぼおどろ かれら いまし おこな
り、彼は之に食を與えんことを命ぜり。其父母駭きたり、イエス彼等に戒めて、行

こと ひと つ なか
われし事を人に告ぐる勿らしめたり。

(比較用 口語訳) そこに、ヤイロという名の人 came。この人は会堂司であった。イエスの足もとにひれ伏して、自分の家においでくださるようと、しきりに願った。彼に十二歳ばかりになるひとり娘があったが、死にかけていた。ところが、イエスが出て行かれる途中、群衆が押し迫ってきた。ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまっていたが、だれにもなおしてもらえなかった女がいた。この女がうしろから近寄ってみ衣のふさにさわったところ、その長血がたちまち止まってしまった。イエスは言われた、「わたしにさわったのは、だれか」。人々はみな自分ではないと言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた。しかしイエスは言われた、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったこととを、みんなの前で話した。そこでイエスが女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません」と言った。しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。それから家にはいられるとき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブおよびその子の父母のほかは、だれも一緒にはいって来ることをお許しにならなかった。人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言われた、「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである」。人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい」。するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。両親は驚いてしまった。イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと、彼らに命じられた。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀3 (金口イオアン) へ